〔新撰六帖〕むつき　家良

さゝ、波や大津の宮はあれぬれど春はふるさず立かはる哉

〔義經記〕しやなわう殿くらま出の事

あふ坂の關を打越て、大津の濱をも通りつゝ、せたのからはしうちわたり、かゞ見のしゆくに付給ふ、

〔玄與日記〕文祿五年十一月十三日、紹巴幽齋三井寺へ行侍りぬ、略中笠取山、日野、山科、音羽里など通り、相坂を越、大津え出申候、志賀の山、ひらの高ねの玄ぐれ、かゞみ山もかきくもり、水うみの船のゆきかひ、たぐひなき有樣也、

慶長二年二月十四日、伊勢へ參宮申、略中十九日大津に著ぬ、略中廿日伏見へ歸りぬ、略中あうさかの走井は、大津のかた也、大津を打出の濱と申侍る也、

鹽津

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思歌

味鎌之、鹽津乎射而、水手船之、名者謂手師乎、不相將有八方、

〔萬葉集略解十一下〕あぢがまは、略中讃岐寒川郡に、庵治の浦、鎌の浦といふ所有と其國人いへり、鹽津は近江に今も有地名也、こゝによみたるはいづこにか、

〔太平記十七〕北國下向勢凍死事

同延元元年十月十一日ニ、義貞朝臣、七千餘騎ニテ鹽津海津ニ著給フ、

粟津

〔伊呂波字類抄安國郡〕粟津アハツ

〔日本書紀二十八天武〕元年七月辛亥、男依等到瀨田、略中大友皇子、文弘左右大臣等、僅身免以逃之、男依等卽軍于粟津岡下、壬子、男依等斬近江將犬養連五十君、及谷直鹽手於粟津市、

〔更科日記〕近江のくに、おきながといふ人の家にやどりて、四五日あり、略中せたのはし、みなくづ